

駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み（3）

八尋 茂樹*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2013年11月13日受理)

本報告は、2013年5月11日、12日の2日間に渡って開催された第15回鳴滝祭(大学祭)において企画した駄菓子屋模擬店の運営結果、そして、2013年7月20日、にいみ御殿町土曜夜市での模擬店の運営結果を地域貢献の視点から捉えたものである。筆者は駄菓子屋模擬店の運営を通しての地域貢献への取り組みを2011年度から継続的におこなってきた(八尋, 2011, 2012)。3年目を迎えた今年度の駄菓子屋模擬店は、昨年度の課題として挙げた(1)駄菓子屋模擬店を継続させることで恒例的なイベント化し、市民の間で定着させること、(2)昨年度、要望が多かった「大学祭以外における運営」について取り組んでみるという2点をテーマとして取り組んだ。今年度の学内外での取り組みの結果、訪れた市民の方々からは総じて好意的に捉えていただき、本実践が少しずつ定着化してきたことがわかった。さらには、運営に携わった保育学生たちにとって、対人労働における基礎について考える機会となることがわかった。

(キーワード) 大学, 地域貢献, 駄菓子屋模擬店

1. 駄菓子屋模擬店の出店状況

2013年5月11日、12日、新見公立大学・短期大学では、第15回鳴滝祭(大学祭)が開催された。筆者は市民ボランティア4名及び筆者のゼミに所属する学生5名の協力を得て、2号館(学食)の後方、3分の1のスペースを使用して駄菓子屋模擬店を開いた。初日、2日目とも10時開店16時閉店とし、来客者は2日間で、児童181名(幼児を含む)、大人433名、合計614名であった(図1)。全体的には昨年度とほぼ同じ来客数であった。

この模擬店で取り扱った商品は、「駄菓子」、「駄玩具」、「くじ」の3つに分類される。具体的には表の通りである。商品の価格は、ゼミ学生がスーパー等での実売価格を調査し、その価格よりも3分の2から半分に設定することによって、来店客、特に児童が購買しやすいように心がけた。

過去2回と同様、昔ながらの駄菓子屋を再現するために、運営にあたったゼミ学生全員が事前に岡山県内の駄菓子屋を訪れて、その配置方法等の調査をおこなった。

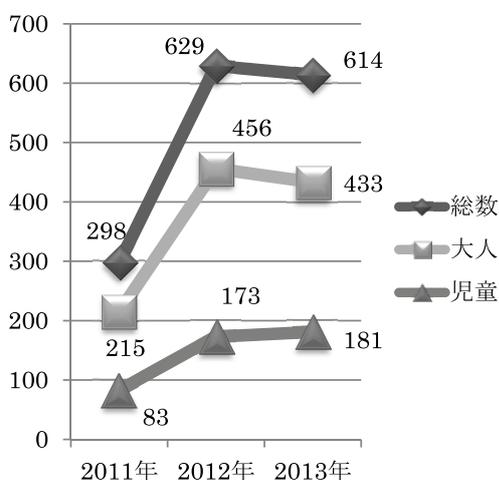


図1 駄菓子屋模擬店の来客者の推移

表 駄菓子屋模擬店で販売した商品

駄菓子	うまい棒, きなこ飴, きなこ棒, フルーツ糸引き飴, モロッコヨーグル, 甘いか太郎, ヤッターめん, カレー味せんべい, フラワートップ菓子, ココアシガレット, 花串カステラ
駄玩具	ようかいけむり, 紙せっけん, おめん, 吹き戻し笛, スライム, おはじき, ソフトグライダー, スーパーボール, ファッションリング, お姫様セット(ティアラ, カチューシャ), ミニカー
くじ	スーパーボール当て, ONE PIECE(ワンピース)文具当て, かわいい消しゴム当て, ディズニー文具当て

*連絡先: 八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

その結果、いわゆる圧縮陳列(狭い空間に多くの商品を配置する陳列方法)の再現や、薄暗い「秘密の場所」のような印象を作るために窓は全てブラインドを閉めるなどの工夫に努めた。さらに、店内では昭和30年代から40年代の懐かしさが感じられる曲を繰り返し流したり、駄菓子を入れる容器も竹かごを利用したり、看板や値段表示等は全て手書きとするなど、少しでも「昔」の印象が漂うように試みた。

II. 実践の結果

(1) イベントとしての定着化

今年度最初のテーマとした「駄菓子屋模擬店を継続させることで恒例的なイベント化し、市民の間で定着させること」については、来店者のうち120名(成人男性30名、成人女性30名、男子児童30名、女子児童30名)への出口調査をおこない、過去2回の模擬店のリピーター率を計算してみた。結果として、過去2年に開催した駄菓子屋模擬店のいずれかに来店した人は、成人男性17%、成人女性80%、男子児童83%、女子児童70%であった。過去に来たことのなかった人からは、「このような模擬店をやっているとは知らなかった」とか、「仕事でいつもは来れなかったので、知らなかった」という意見をいただいた。

商品では、慣れ親しんでいるうまい棒が大人にも子どもにも圧倒的に人気があり、開催両日ともに販売予定数が午前中で売り切れる状態となった。また、きなこ棒や花串カステラなどは最近の子どもたちは知らない駄菓子であったが、同伴してきた親や、店員の学生の勧めで購入し、子どもたちに喜ばれる駄菓子となった。駄玩具ではスーパーボールが男児にも女児にも大変人気があった。ようかいけむりなど昭和に流行したものに関しては、やはり親や店員が実践することで子どもたちが興味を持ち、積極的に購入される駄玩具となった。くじは、近年子どもたちの間で流行しているONE PIECE(ワンピース)文具当てに列ができた。



図2 25年度の駄菓子屋模擬店の様子

このようなイベントの展開を受け、聞き取り調査をした120名全員からは、「来年も駄菓子屋模擬店をやってほしい」という期待を寄せていただいた(図2)。今後も継続することで、より定着させられるよう努力したい。

(2) 大学祭以外における運営

今年度2つ目のテーマ「大学祭以外における運営」については、7月20日(土曜日)に開催された「にいま御殿町土曜夜市」に模擬店を出店させていただくことで調査をおこなった。ここでの運営は、市民ボランティア1名および筆者のゼミに所属する学生5名の計6名でおこなった(図3)。来店者数は、児童43名(幼児を含む)、大人31名であった。



図3 25年度の土曜夜市での模擬店の様子

この学外での取り組みでは、5月の大学祭で訪れた児童181名のうちで来店した児童は、確認できただけで20名前後にすぎなかったことがわかった。児童らに話を聞くと、今回、駄菓子屋模擬店が出店されることは自分たちの小学校でも噂になってはいたが、小学校から本学はすぐ近くだったので大学祭には簡単に来れたが、夜市会場の御殿町は学区から離れていて遠いため、行くのを躊躇した児童が多いとのことであった。

この日の模擬店自体は非常に盛況で、来店した児童らの多くからは、来年度の大学祭の模擬店にぜひ行きたいという声をもらうことができた。

(3) 運営に携わった本学学生が得たもの

本実践では、できる限り駄菓子屋の雰囲気近づけるため、そして、駄菓子屋模擬店の運営から何を学ぶかを明確にして臨むために、毎年、模擬店運営本番前に、運営に携わる学生が実際に岡山市で駄菓子屋を経営されている店を訪問し、駄菓子の配置方法等の調査をおこなっている。また、その調査の際に、店主からは駄菓子屋に集まってくる子どもたちの昨今の特性や、駄菓子屋を運営していく上での姿勢など、多くのことを教えていただいている。今年度も、岡山市内のA駄菓子屋店とB駄菓



図4 駄菓子屋での勉強（A駄菓子屋店主と撮影）

子問屋を訪れ、学生たちは店主から指導を受けた（図4）。

その後、これらの駄菓子屋店の店主とは、学生たちが手紙のやりとりをおこない、A駄菓子屋店の店主からは以下のようなお言葉をいただいた。

「いただいたお手紙とお写真から、学園祭での盛況ぶりが良くわかります。地域の方々に愛され、みんな笑顔でうれしそうですね。このような仕事の体験をされ、良い社会人として、良い保育士さんとして、そして、やがて良いお母さんとなって生活してください。私も訪れるみなさんのおかげで元気でいられます。現代風の子も、ワルの子も、みんな成長して家庭を持ち、久しぶりに来ては「おばちゃん元気か」「いつまでも続けてよ」と優しい言葉をかけて、どっさり大人買いしてくれます。その時に、「子どもを持ってわかるでしょう。親を大切に、優しい言葉をかけてあげるのよ」と一言付け加えるようにしています。みんなのうさいおばあさんです。」

このやりとりを通して、学生たちは「駄菓子屋さん、訪れる人たちを笑顔に、そして元気にする職業であることを学んだ。同時に、訪れる人たちから笑顔にしてもらい、元気をたくさんもらえる職業である」ことを知った。また、「対人援助職という専門職の基本的な姿勢を教えていただいた」という学びも得た。

また、大学祭での模擬店、そして、土曜夜市での模擬店の2つの運営の反省会で、学生たちからは以下のような意見が出た。

「今の子どもたちが何をして遊ぶのか、何が好きなのかを5人で何日もかけて考えて集めた景品でしたが、まだまだ勉強不足、調査不足でした。子どもたちのことを知っているようで知らないということが、子どもたちと直に触れ合うことによってわかった」「駄菓子を買っていただく、くじを引いていただくという行為が、売る側の目線ではなく、買う側の目線でなければ、目の前の相手を十分に満足させることができない。これは、保育や教育で必要な考え方だと思った」「駄菓子を買ったり、くじを引いたりして喜んでる姿にうれしく思う一方で、何度も

何度も同じ子がくじを引いて、後ろに列ができてしまうことがあると、公平性も考えなくては、本当に多くの人を喜ばせていることにならないと感じた」「販売する係でない時に休んでしまっていたが、くじを引く順番を誘導するなど、運営を上手におこなうためには、ほーっとする時間を作ってはいけないことを知った」「模擬店運営は楽しいが、実際にはお金を扱っているの、楽しいだけでは失礼なことも発生し、緊張感を持って接することが必要だと知った」

学生たちは以上の考察から、「保育の現場でも、保育する側の目線だけに縛られてしまうことなく、保育を依頼する側の目線に立って考えられる保育者像が大切だとあらためて思った」と、保育学生としての自分たちが、ひとりひとりとの結びつきを大切にする対人援助職の基礎について学ぶヒントがこの模擬店運営にもあり、「この経験をもとに、今後、現場での実践を通して深めていきたい」という課題に到達した。このように、ただ「子どもが好きだから」という理由で保育者を目指すのではなく、プロが必要とされる顧客満足を高めるための勉強をすることは、保育や教育について教室で学び、現場で実習をおこなうことでより良い保育者像を目指している学生に対して、深みのある考察をする機会を与えるのではないかと考える

III. 来年度にむけての課題

本年度までの取り組みから、訪れる市民の方々からは総じて好意的に捉えていただき、また、定着化に向けて少し前進したように思われる。しかし、本学の属する地区と、そこから離れた地区での模擬店運営の実践では、必ずしも利用者が重ならなかったことから、来年度は(1)大学祭での模擬店を継続することにより、大学を身近な存在として捉えていただく、(2)大学から離れた場所での運営もおこなうことによって、大学付近だけの交流ではなく、より広域の住民の方々に大学に親しみを持っていただく機会を増やしていく、(3)それらを継続することによって、広く市民に認知され、受け入れられ、町と一体化した活動ができるよう努力していくというテーマを掲げて取り組んでいくことが重要であると考えた。

「継続は力なり」という言葉は誰もが知っているが、本稿の取り組みにも当てはまる。本年度は地元商工会議所や、地域貢献活動をおこなっているNPO関係者の方々と、「今後、街を盛り上げていくために連携をとっていく」という方向性で一致できた。来年度も、このイベントの定着化と、今年度以上に広い地域での活動をする事により、地域の活性化をおこないながら、大学が街に溶け込むための一助となれることを目指していきたい。

文献

- 1) 八尋 茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み，新見公立大学紀要，32，195-197，2011.
- 2) 八尋 茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み2，新見公立大学紀要，33，165-167，2012.